ノーサイド

潮陵ラグビー部ＯＢ会会報
第２号
会　長：藤中博文　☎０１３４－６２－２３５１
事務局：〒047-0034　小樽市緑２－１１－７
久保寿史方
箕原武夫　☎０９０－８６３７－９９８８
会報編集部：間　博信　☎01237-2-3536

50周年に50余人が集う

現役がシルバー軍下す

ＯＢと恒例対抗３試合

小樽潮陵ラグビー部恒例のＯＢ－現役対抗戦は平成十一年八月十五日、母校の潮陵グラウンドで三試合行われた。今年は創部五十周年を迎え、小樽、札幌をはじめ遠く東京、埼玉から五十余人のＯＢが駆けつけ、盛り上がりを見せた。緒戦のシルバー軍団対現役戦は28－0で現役に軍配が上がった。続くミドル軍団対現役戦第二試合は28－0、同第三試合は28－7でいずれもミドル軍団が連勝した。

現役とＯＢが激しいボールの奪い合い

午後一時半から開会式。ＯＢを四十代以上のシルバー軍団と三十代以下のミドル軍団とに分け、現役軍団と二十分ずつ、三試合を行った。快晴、気温32℃の炎天下、グラウンドには芝はなく、水気を失いハードな状態の中、午後二時にキックオフ。

△第一試合▽シルバー軍団－現役戦　シルバー軍団の体格は腹ばかり前に突き出て、まるで相撲部と間違えられそうな猛者連中。ドタドタと重厚なフットワークはいかにも力強そう。さすがスクラム、モールは強く、長年の経験からか、このグラウンド状態を緻密に計算したまでは良かった。

タックルはあくまでも控え目。ただ力任せに引きずり倒す攻撃の中、中盤までやや押し気味に展開した。ところが、現役軍の若さとスピードには追いつけず、いささか体が重すぎたせいか、時が経つとともに、段々と、段々と…。

若い者に花を持たせ、胸を貸すのも良きＯＢとばかりに、結果は28－0と初の一敗。二十分、一人の交替もなく第一試合を終えた。

△第二試合▽ミドル軍団－現役戦　午後二時二十分にキックオフ。ミドルとは言え、多くは二十代、今年卒業したばかりのＯＢも交じる軍団。シルバー軍団の雪辱戦に、「びしっと鍛えてやる」とばかりに、スピード、力ともに現役軍を終始圧倒し、28－0で快勝。

△第三試合▽ミドル軍団－現役戦　午後二時四十五分にキックオフ。現役にとっては夏休み最後の練習試合。ワントライ奪取の願いからか、成田監督も思わず興奮気味にグラウンドに入り込み怒鳴りながら指示。

その恐怖からか、若者の情熱からか、みんな引き吊ったような形相で、果敢なタックルを繰り返し、ついにワントライを奪取。しかし試合は28－7でミドル軍団の連勝となった。試合後次回の再会を約して散会。

32℃の炎天下で

試合前に全員勢揃いして開会式

会費・寄付の納入法

会費や御寄付は下記の郵便払込口座番号にお払い込み下さるようお願い致します。

郵便払込口座番号：

０２７１０－１－９２７０

名　儀：小樽潮陵ラグビー部ＯＢ会事務局

ＯＢ各位様、会費や御寄付をありがとうございます。９月現在で、会費の納入をお忘れの方、１日も早く納入願います。

ＯＢ会スナップ

ＯＢ会の総会に出席した面々

⇧和気あいあい賑やかにＯＢ会の総会

裸の付き合い

ジャージーを脱ぐ戦友二人

「暑い暑いっ！」－思わず

第18回総会に27人が出席

会則改正し事務局を強化

交流フェスィバルも開く

第18回小樽潮陵ラグビー部ＯＢ会総会は８月15日夜、小樽の『潮騒』で開かれた。箕原事務局長の司会・進行により、藤中会長と成田監督が挨拶し、関川顧問の音頭で乾杯。和気あいあい、無礼講の中、活発な意見が交わされ、次のようなことが討議、決定され、午後８時半、総会は終了した。

①新任事務局員の紹介、承認。②会報の発行、会費徴収等に関わる会則の改正、立案の事務局一任。③従来、ＯＢ戦と総会を同日開催していたが、これを切り離して開催する。④より多く、幅広いＯＢの参加と交流を深めるべく、ＯＢ戦当日は試合終了後、現役、ＯＢ、さらに家族を加えた一大交流フェスティバルを開催する。

壮行会で激励の挨拶をする藤中会長

大地の感覚

副会長・60期　河合口　芳邦（真宗大谷派浄秀寺住職）

今年は創部五十周年－その歴史を担っての我が潮陵ラグビー部は堂々地区予選を突破し、全道大会へと歩みを進めた。

さて、そのＯＢは会員数現在三百五十余人にもなるというが、「去る者は日々に疎し」の道理（ことわり）の如く、グラウンドで楕円球を追い、日々に交わり常に青春を謳歌した人々も歳月（としつき）を隔てれば疎遠となり、汗と涙の合宿練習の慌ただしさも　水泡（うたかた）のごとく忘却は人の世の習いというべきか。

だけれども、我らその時々の「大地の感覚」に思いを出（い）だし、その願いを我らが後輩たちに微力なりともかけてゆくべく、新生ＯＢ会がキックオフしました。これはひとえに伝統の中で先輩諸氏から我々にかけられた願いがなさしめた業（わざ）ではなかろうか。

古語に曰く「前（さき）に生まれんものは後を導き、後に生まれん者は前（さき）を訪（とぶら）い、連続無窮（ぐう）にして、願わくは休止（くし）せざらしめんと欲す」と。

その通りである。諸先輩を訪（とぶら）って、その導きにあうこと、希（ねが）わくば今ここに集える人々、改めて半世紀の歴史と伝統を仰ぎつつ今こそあの「大地の感覚」を、思いを形にして、後輩たちにでき得る限りの手を差し延べ、潮陵ラグビー部の活躍と、そしてＯＢ会の相続、倦（う）まざらんことを願ってやみません。

相川先輩への恩返しに

箕原　武夫（63期・箕原商店社長）

この度、事務局長という大任を喜んでお受けする事になりました63期の箕原です。

潮陵ラグビー部ＯＢ会の仕事を、中心になって下さっていた一年先輩の相川伸廣さんが、三年前に急逝され、しばらく途絶えていたＯＢ会の行事を、皆様のお力で昨年、復活させる事が出来て感謝致しております。

ＯＢ会を人一倍愛し、私たち後輩のことをいつも心配し、可愛がって下さった相川さんに、少しだけでも恩返し出来たかなと思っております。

事務局長と言っても私には何も出来ませんが、幸い優秀な事務局のメンバーがぬかりなく全ての事を行ってくれていますので、私はみんなのまとめ役に徹していきたいと思っています。会則改正や会報作成業務、年会費徴収、新入部員助成事業、ＯＢ対現役戦の開催、全道・全国大会出場壮行会開催等、事務局として手掛けるべき事は沢山ありますが、精一杯頑張りたいと思います。皆様のご協力をお願いします。

リレー雑記帳　②

不敵な面構え、挑戦的な雰囲気

地下足袋を履いたラガー

人生残照の刻。古い思い出が突然、昨日のことのように、鮮明に浮かんでくることがある。

先日も押し入れを整理していると、１枚の写真が眼にとまった。セピア色をした写真の裏に「昭和23年夏ラグビー校内対抗戦」というメモがあった。地下足袋を履いて不揃いのシャツを着て、何とも情けないラガー集団である。だが良く見ると、全員が不敵な面構えをしている。何者にも負けない挑戦的な雰囲気が滲み出ている。半世紀以上も前のラグビー少年の姿だ。

戦争に敗けて自由の時代になり、米軍の指導で教育制度が次々に変革された。６・３・３制、男女共学と目まぐるしく変わり、小樽も庁立と市立の中学が合併して、小樽高等学校が誕生した。市立中学（通称・長中）の連中が、机をかついで長橋から汐見台まで、蟻の行列よろしく歩いて移動し、樽中の門をくぐった。

勉強家が多い樽中生に比べて、長中生は乱暴で暴力タイプが多かった故か、トラブルも多かった。

食料不足による欲求不満も加わって、暴力的になっていた私たちに、体育担当の安井先生が声をかけた。「１年先輩がラグビー部を創ったので、君たちも参加しないかね」ということで、私が中心になって同志を誘った。

セピア色の写真は上級生と一緒に初めて対抗戦をした時のもので、後列左端のジャージー姿が小生である。（昭23年夏）　先輩43期のラグビー部員の態度は、真摯そのものだった。ルールの勉強会、チームの育成…ラグビー精神を基本に、切磋琢磨する先輩たちに対して、44期（獅子の会）のメンバーは、「ラグビーは格闘技なり」とばかりに、まるで喧嘩腰。先輩たちからはかなりの顰蹙（ひんしゅく）を買っていた。

左端が私

44期・和田　朗

プロフィール　昭和25年潮陵高校卒、29年に早大卒、ＨＢＣに入社。報道畑を歩き専務取締役を最後に退任。

炭殻ですりむき血だらけ

初めての対外試合で、札商と北大グラウンドで対戦すると決まった。しかし先輩からは「お前らは反則ばかりするから出場するな」と言われ、ベンチで野次ばかり飛ばしていた。

それでも、炭殻を敷き詰めた花園グラウンドでは走りに走った。転倒すると炭殻で擦りむいて血だらけになった。「痛い」と言うと「水道の水で洗え」…で終わり。今でも膝にその時の傷痕が入墨のように残っている。

小樽高校は私たち44期の卒業で消滅、男女共学の潮陵高校に替わった。

50年前、地下足袋ラグビー部員たちは、誇りを持って花園炭殻グラウンドを走り回った。「腹が減ったヨー」「何か食いたいヨー」と喚きながら走って、ボールを蹴った。青空高く上がるボールを追う眼に、天狗山の紅葉が美しく映えた。もう亡くなり鬼籍に入った友の顔が浮かぶ。白い歯を見せて「走れ！走れ！」と叫んでいる。

セピア色の写真は、何時までも語り続けてくれる。

ラグビーで体調回復

67期・神原　浩

今年からＯＢ会の手伝いをさせて頂いている67期卒業の神原　浩です。私事ですが、今年一月に人間ドックで肝臓が引っ掛かり、入院するか週二度の点滴を受けるようにとの診断をされました。

その頃、ちょうどＯＢ会があり、箕原、糸田両先輩に誘われ、二十七年ぶりにラグビーを始めたところ、毎週練習に励んでいるうちに体調も良くなり、また少しずつラグビーを楽しめるようになりました。つくづく高校時代にやっていて良かったと思う次第です。

ラグビーを再開してから、より一層ＯＢ会の活動にも励みとなりました。活動状況等を見ていますと、まだ参加される方が少数です。

ＯＢ会の皆様には、会費や寄付等の御支援を頂くとともに、電話やＦＡＸ、手紙等で御意見や希望等を事務局あてに随時お寄せ頂ければ、より一層、会の発展と充実に役立てられるものと思います。

ユニークな人間集団

私とラグビー

53期・池内寿夫（利礼資材㈱代表取締役）

ラグビーとの出会いは、中山先生から「ラグビーをやってみないか。男のスポーツで格闘技だ。やったら面白くてやめられんぞ」と言葉巧みに誘われ、格闘技という言葉に引かれてやってみる気になりました。

ところがいざ蓋を開けてみると、部員は一人もいない。用具はささくれ立ったボールが二個、雑巾にもならないようなジャージー、泥の固まったようなスパイク、と惨憺たる状態。そうこうしているうちに、部員もなんとか集まり始めユニークな集団ができました。

当時、練習と言えば、ルールも知らない人間同士がただボールを相手にぶつかったり、蹴ったり、転んだり。まるで野良犬が獲物を前にケンカでもしているようでした。

日を重ねるごとに楕円形のボールに魅せられ、練習が面白くなり、放課後が待ち遠しく、来る日も来る日もルールブックを片手に練習したものです。

試合になるとこれがまた面白い。ユニークな個性の持ち主ばかりで、チームワークなどまるで関係なく、ボールを持ったら敵も味方も見えなくなり、ゴール目がけて走るのみ。倒されるまで放さない。だから倒れると、そこにはすぐ人の山ができ、下になった人間は顔は踏まれるわ腹は蹴られるわ。

試合が終わると、俺は何人倒したとか、何回倒された、という話ばかりで、ラグビーを上手になろうなんて考える人間など誰もいなく、ただ体と体がぶつかり合うのが楽しくて仕方がない連中ばかりでした。だから私たち同期にはラグビーで大成した人はいません。

今でも当時のスクラムを組んだ感覚や汗の臭いなど強烈な印象が残っており、これからも自分の生涯の思い出として大事にしていきたいと思います。

ＯＢ会を活性化しよう

77期・村山康志

（ソニー生命保険㈱）

私、77期の村山（通称エスパー）と申します。こんなに早く執筆依頼があるとは思いませんでしたが、ご指名ですので、喜んで書かせていただきます。

さて、ＯＢ諸兄、ご存じの通り、潮陵高校ラグビー部に成田先生が監督として来られてから、後輩諸君の活躍は目覚ましいものがあります。今年も全道大会に駒を進め、今では常連校の仲間入りです。近い将来、花園での勇姿を見せてくれることでしょう。

後輩が頑張っている姿を見て嬉しく思わないＯＢがいるでしょうか。何とか勝たせてやりたい、応援してあげたいと思うのではないでしょうか。そのためにはＯＢ会が組織として充実しなければなりません。

しかしながら、名簿も故相川先生が残して下さったものを今も使っており、諸連絡も本人の手に渡っているかどうかも定かでない現状です。微力ながら、まずは名簿の整備が急務と思い今年から若手ＯＢを中心に協力を呼びかけています。

二十代、三十代の方々は何かとお忙しいとは思いますが、可愛い後輩たちのために、会の運営に積極的に参加していただきたいと思います。いつも同じメンバーでは、なかなか経済的な援助も限られてしまいます。後輩を応援するのはもちろんですが、年に一度のＯＢ戦で老いも若きも一緒に汗を流せたら楽しいと思いますが、いかがでしょうか。

今後もＯＢ会活性化のために、何とぞよろしくご協力をお願い致します。

全道大会に二年連続出場

ＯＢ会から20万円、壮行会も

潮陵高校ラグビー部の現役たちは平成十一年九月三日、小樽市カラマツグラウンドで桜陽高校チームと対戦、55－3の大差で圧勝し、二年連続全道大会へと駒を進めた。これを祝いＯＢ会は大会出場費用にと二十万円を寄贈した。

また、九月に北見で行われた全道大会への出場を前に、現役を励ます壮行会が父母、ＯＢ会の手で開かれ、現役のラグビー部員たちを励ました。

サボってばかりの高校時代

昭和56年卒・佐藤　幹夫

（現札幌山の手高校ラグビー部監督）

高校１年の秋。「新人戦でメンバーが足りないので、試合に出てくれないか」と、ラグビー部の友人に声をかけられ、「面白そうだな」と思って放課後の練習へ。当然、練習着もスパイクも何もなかったので、先輩のお下がりをもらった。その日は、引退した３年生との練習試合だった。ポジションは右ウイング、無我夢中で走り回った。その日に習ったタックルが決まった。

これがラグビーとの最初の出会いだった。思い切り走り、ぶち当たり、ふっ飛ばし、こんなに楽しいスポーツがあるのかと…。しかし練習はきつく、元来遊び人の私は、いつもサボり、みんなに迷惑をかけていた。

３年生になり最後の大会、岩内高校との一戦であった。春の試合では大敗していた。試合前、「今日でラグビーともお別れだな」と誰かが言った。みんなも、そう思っていた。その日は激しい雨のためグラウンドがぐしゃぐしゃで、ボールがどこにあるのかわからない。すると突然出てきたボールが私のところへ…無我夢中で走った。そしてトライ。

グラウンドのコンディションはさらに悪くなり、岩内高校も焦ってミスばかり。結局16－11くらいのスコアで勝ってしまった。６年ぶりの全道大会出場であった。部員もＯＢもみんな大喜びだった。全道大会は室蘭工業高校のグラウンドで行われた。１回戦の相手は札幌清田高校だった。最後は自力の差で負けてしまったが、後半10分まで12－12の同点、大健闘だった。

この試合がその後の私の人生に大きな影響を与えることになった。「もう一度、いい汗を流したい」と思い、国士館大学ラグビー部の門をたたいた。練習、寮生活、何もかもが厳しかった。４年間、学生食堂のアルバイトも経験した。卒業後、北海道の教員を目指してＵターンしたが、採用試験に落ちた。そのため仕事は地元の漁師の手伝いから始まり、その後、羽幌高校、豊浦高校、潮陵高校、前田中学と臨時で勤めた。その後、札幌山の手高校に拾ってもらった。山の手高校はちょうどその年、男女共学になった。

校長先生に「サッカー部をみてほしい」と依頼されたが、どうしてもラグビーがしたかった。片っ端から声をかけた。15人に名前を書かせて校長室を訪れ、「こんなにラグビーをやりたいやつがいるんです」と説得した。すると「それほど言うのなら…」と、ラグビー部が誕生した。しかし、適当に集めたメンバーだから、サボるわ辞めるわで、いつも練習に来るのは２、３人だけだった。

その後、いろんな事があったが、３年目で公式戦初の１勝。７年目で全道大会に初出場して３位。11年目の昨年は全道大会初の決勝進出。今年こそは…と密かに期待を…。

いま私がこうして山の手高校ラグビー部を指導しているのも、高校時代に練習をサボっていた私を見捨てずに、いつも声をかけてくれた回りのメンバーがいてくれたお陰だとしみじみ思う。「一緒に頑張ろう」と声をかけ合うことが、何よりも強い支えになるのだ。いつも私の心の奥底にこの時の思いがある。

これからも高校時代の"自分"に声をかけるように指導を続けて行きたい。

●スクラム●

／予定通り第２号を刊行できた。資金不足もさることながら、原稿集めにいつも泣かされる／うまく書こうとか、面白く語ろうとか、気張ることはない。まってラグビー話ばかりを求めているわけでもない／ＯＢ各位が、それぞれの何気ない日々の出来事や、思い出を淡々とつづり、友への便りがわりに書くだけでもいいではないか／そんな記事を遠方にいる仲間が密かに読んで、ニタッと笑えば…、それで極上、極上／今回は原稿不足を心配したのに、いざレイアウトしてみると足りないどころか、あふれ気味／たくさん撮った写真を組み込む余地があまりなく、提稿して頂いた原稿の中に、一部添削したものもある。悪しからず。（間）